

教育と宗教

— 北海道家庭学校の思想と実践に学ぶ —

松田 高志

Summary

Education and Religion : Learning from the Philosophy and Practice at Hokkaido Family School

Takashi Matsuda

Religion requires education in its broad sense; and education, in its ultimate phase, cannot do without religion. The relation between education and religion, however, contains difficult problems.

The majority of modern educational philosophies agree that human nature is good, and that education is a means to achieve its goal of goodness. In contrast, many religions, especially orthodox Christianity, believe that human nature is not so good and that it needs salvation by God. Religions sects tend to be exclusive and compulsory, while educational institutions presuppose the spontaneity of children and aim at the cultivation of liberal judgment.

In consideration of the question at issue, Hokkaido Family School presents a unique and interesting case. The school is a juvenile reformatory. The pupils there are forced to attend, and the education is based on Christianity.

The school is located in a grand natural environment where pupils can fully experience the severity as well as the abundance of nature. As the school title indicates, the institution offers its pupils a home-like atmosphere at its dormitory. The pupils can live with and learn from many people.

Tomeoka Kōsuke (the founder and the first principal) and Tani Masatsune (the current principal) both believe that service and prayer perform a vital function in the education at Hokkaido Family School.

The two principals assert that the essence of faith lies in piety and reverence. These key concepts, in turn, offer a common ground between education and religion, which is amply shown in the philosophy and practice at Hokkaido Family School.

(序)

教育にとって、宗教は最大の難問であると言ってよいであろう。近代の教育思想において、「子どもの発見」とか「子どもから」と言われる時は、人間の本性は善であり、人間は基本的に自己活動的であるということの表明である。しかし宗教、特に高等宗教と言われるものは、人間をそのように肯定的に見ているとは言えない。むしろ人間存在に対して、多くの場合極めて否定的であり、原罪や業（カルマ）というものが人間観の中心になっている。又宗教は、その根源性の故に、絶対性を主張し、教育される者の自己活動性、主体性、「思想・信条の自由」を否定しがちである。とは言え、教育史においてコメニウスにせよ、ペスタロッチにせよ、フレーベルにせよ、近代教育思想を代表する人たちが、熱烈なクリスチャンであったということも事実である。我が国においても、明治以降、近代的教育の代表的な実践者であって、しかも熱心なクリスチャンであった人は少なくない。これは、どういうことであろうか。

教育と宗教の問題は、教育にとっても、宗教にとっても根本的問題である。いずれにおいても、根本原理に関わる問題である。ここでは、具体的に一つの学校を取り上げてこの問題を考えてみたい。それは、北海道家庭学校である。但し学校と言っても、正確には教護院（感化院）である。ここは、私立のキリスト教主義の男子教護院である。少年たちは、一般の私立学校と違って、意に反し、強制されて入校（入学とは言わない）して来る。この学校は、塀のようなものは何もないが、しかし当然「無外」（無断外出）は禁じられている。学校が、認める迄は卒業することは出来ない。その期間は、予め決まっていない。

このようなキリスト教主義の教護院というものは、その成り立ちにおいて、教育と宗教の根本的問題を含んでいる。人間の本性をどう見るかという点において、又「思想・信条の自由」という点において。北海道家庭学校は、この問題に関し極めて興味深い示唆を与えてくれているように思う。以下において、主に北海道家庭学校の創設者である留岡幸助初代校長、及び現校長の谷昌恒氏の思想と実践に学びながら、この問題を考えてみたい。

(一)

北海道家庭学校は、大正3年（1914年）、家庭学校社名淵分校として創設された。創設者の留岡幸助は、同志社英学校神学科在学中に、「人間社会には二つの闇黒な方面、即ち一は遊廓、一は監獄のあること」(IV-532)¹¹に気づき、「基督教の光を以て此二大闇黒面を照らすの必要を認め、二者のいずれを選びて畢生の事業と為すべきかに就いて種々考慮する処あり、終に身を以て監獄改良に当るべき決心を為し」(同上)たのである。

留岡は、同志社を卒業後、牧師として丹波第一キリスト教会に赴任するが、数年して北海道空知集治監の教誨師になる。ここでの経験から、ほとんどの犯罪の芽は既に幼少の頃に発生していることを知り、このような少年の教化の必要性を痛感し、少年感化院の視察と研究の為に

渡米した。2年間の留学の後、感化院設立の準備に奔走し、明治32年（1899年）東京巢鴨に家庭学校を設立した。当時、神道、仏教系の感化院は既にあったが、キリスト教主義の感化院としては最初のものであった。

留岡は、この巢鴨の家庭学校での経験を踏まえ、長年温めて来た理想を実現すべく、大正3年、北海道社名淵の原野1,000町歩の払い下げを受け、そのうち750町歩を新農村の建設にあて、そこからの収益で感化院を維持するという壮大な構想で家庭学校社名淵分校を開設した。彼は、若き日より、我が國の「二大闇黒」の一つ、監獄の問題に取組み、特にその根本的解決としての感化事業をライフワークとし、極めて気候の厳しい地に身を投じて理想を実現させたが、これは、留岡のキリスト教信仰から生まれたと言ってよいであろう。先ず、彼のキリスト教信仰とはどのようなものであったかを見ていきたい。

顕著に見られることの一つは、繰返し述べられているように、「宗教は活動なり」（II-7）ということである。「宗教は救なり、然れども救はれし結果は活動に外ならず。故に宗教は活動なりと言うも敢て過言には非るべし。」（同上）あるいは次のように言われる。「聞け、ヤコブの言葉を、曰く『信仰若し行を兼ねざる時は乃ち死るなり』と。基督の生命は活動である、此の生命は即ち人を馳って活天灘地の人物たらしむる要素である。」（II-21）

このような立場は、いわゆる正統派の植村正久から、「矯風基督教なり、孤児基督教なり、監獄改良基督教なり、之を基督教生活の実験と云へる意味の中に含まれたるものとしては甚だ謙らざるを覺へて尚ほ浅しと謂はざるを得ず、……唯だ海辺に遊て波の打ち寄する辺を徘徊して水を逐ひ貝を拾ひ何の思慮もなく遊ぶ小児の如し」と手厳しく批判されるが、留岡はこの批判文を引用しつつ、「植村君の如きは我が基督教を思念界に止めて以て最上となすものなり、思念界にのみ深きは實際の世を救ふ上の浅瀬にあらずや」（I-380・381）と反論している。

ここで言われる「活動」は、「愛の活動」に他ならない。このことに関し、次のように言われる。「思ふに道徳の教は主義を教ゆるものなり、道行を教ゆるものなり、されど宗教は教に非ず活動力を与ふるものなり、又其道行を教ゆると共に実行力を与ふるものなり、我邦夙に孔子の道徳教により道徳の主義を知れりと雖も而かも其実行力を有せず、之れ愛の活力生命を基礎とする基督教を我邦に入るの必要ある所以なりとす。」（I-156・157）孔子のことはともかく、キリスト教信仰の急所をつく言葉であろう。

愛の活動力と並んで、もう一つ顕著に見られる留岡の信仰の特徴は、はたから見れば無謀とも思える壮大な夢をいかなる困難にも屈せず実現しようとする楽天主義である。これは、「善は必ず栄へる、悪は必ず衰ふる」という「無限絶対の力に倚る信仰」（III-341）に基づくものである。

ところで、感化院（教護院）は、後にも触れるが、留岡の場合、家庭学校という名称からも分かるように、単に福祉施設ではなく、むしろ教育の場であり、しかも純粹な、徹底した全人教育の場である。留岡において、キリスト教と教育は、どのような関係にあるのだろうか。

「罪人を良くすると云ふことに関しては、宗教は広義に於ける教育であらんければならぬ。基督は勿論宗教家である。けれども此の宗教家たる基督は又教育家である。人を善良ならしむ

るに於て、神の力を喚ぶ上より云へば、基督は慥かに宗教家である。然れども、人力を尽して救を全ふせよと訓ふる点より云はず、基督は又實に教育家である。」(II-28) 宗教、特にキリスト教は、廣義における教育であり、キリストは教育家であるという見方は、大変ユニークであり、又留岡らしい見方である。これは、どういうことであろうか。『信仰と修行』と題するエッセイに、次のように言われている。「基督は教を説くに、能く種子の例をひかれたが、宗教は實に一片の種子を心に植ゑつけるので、之れが天の光りと、己れの滋養分とに由つて、生長するものでなければ、宗教は以て其光輝を發揚するに足りない。」(II-540) 少し違った言い方であるが、次のようにも言われる。「神信心は人の本能である。……此の自然にして、眞実な本能を弥々長養し、訓練して行くことが宗教の道である。」(III-344) この「生長」、「長養」の目標は、中途半端なものではない。「我が主なる基督は、直観的に、爾等天の父の完きが如く完くなれと、修養行程の大終極を直示されてゐる。」(IV-295)

ところで、教育に関し、留岡に最も大きな影響を与えたのは、ペスタロッチであった。留岡は、留学先のアメリカから帰り、感化院設立に奔走する頃（明治31年）から文章の中でもペスタロッチについて言及するようになるが、おそらくそれ以前から関心を持っていたであろう、そして終生ペスタロッチに傾倒している。井上勝也氏によれば、ペスタロッチのことは、既に明治10年頃から我が国に紹介されているが、開発主義教育の教授法を工夫した人、又は教育愛の権化としてあって、それがキリスト教的人間平等觀に基づくことを指摘し、彼のキリスト教信仰からその教育思想を理解しようとするものではなかった。「それに対し、留岡はペスタロッチの教育思想を理解する場合に、熱心なプロテスタント・ペスタロッチとして、貧民・孤児の父・社会改革家ペスタロッチとして、人間ペスタロッチの全体を受容した上で具体的に彼の教育思想を理解しようとしている点が注目に値する。」²⁾ 又我が国の著名なペスタロッチ研究家たちに対して、井上氏は次のように厳しく批判している。「彼らがキリスト教を自己の宗教・人間觀としていないためか、人間ペスタロッチの生き方を決定づけた彼のキリスト教を全く研究の対象とはしなかった。」³⁾ それに対し、留岡のペスタロッチ研究について次のように言われる。「留岡のこのようなペスタロッチの総合的理的理解の方法は、我国のペスタロッチ研究史上特筆すべき点である。」⁴⁾

留岡がペスタロッチのキリスト教信仰に関心を持ったのは、確かに井上氏の言うようにその教育思想を根本から理解する為であったが、しかしもっと言えば同じようにキリスト教信仰を持つ教育家として、主体的、実存的にペスタロッチの信仰そのものに関心を持っていたからであるとも言えよう。『ペスタロッヂの宗教』(II-207～210)、『ペスタロッチと其宗教』(II-401～404)、『ペスタロッチの宗教觀』(III-32～44)、『基督信徒としてのペスタロッチ』(IV-469～473) 等、論文の題目を見ただけでも、ペスタロッチの宗教觀そのものに対し、いかに強い関心を持っていたかが分かる。

留岡が、特にペスタロッチのキリスト教信仰に關心を持つのは、人間の本性を善としてとらえるペスタロッチや留岡自身の人間觀とオーソドックスなキリスト教（特にプロテスタント教会）の人間原罪説の間に對立があるからではないだろうか。既に述べたように、留岡は、正統

派の植村正久から批判されているが、自分の信仰の立場について次のように述べている。「余輩は宗教として自力宗のユニテリアンを賛成することは出来ないが、又之を同時に信ずれば救はれると云ふことのみに重きを置いて、克己復礼の修養を積まないオルソドキシーをも信じることが出来ない。余輩は所謂オルソドキシーでもなく、又ユニテリアンでもない。……余はクリスチヤンなりと言ふより外はない。換言すれば、余は基督の信者なりと言はざるを得ない。」(II-28) 留岡によれば、教団や神学に関係なく、キリストに出会い、そこから新生のいのちの力と生きる方向を与えられる限り、キリストの信者なのである。

ここから、留岡はペスタロッチの信仰に大いに共鳴している。「彼（ペスタロッチ）は当時の形式的宗教を信ぜず、学校に在りてキヤテキズムを読ましむることを欲せず、搗て加えて彼は児童は無邪気なりと主張せしかば、当時のクリスチヤンは彼を以て原罪説に反対するものなりとて批難せり。而して彼は天性の宗教的性格なるに係はらず、却って非宗教的人物なりと称へらるに至りぬ。衆愚の世を謬る概ね斯の如し、豈又恐るべからずとせんや。」(II-403・404) (括弧内は筆者の註。以下同じ)

それでは、留岡はペスタロッチの信仰の核心をどこに見ていたのか。留岡は、次のように述べている。「(ペスタロッチによれば) 神は愛なるが故に人もまた神を愛せねばならぬ。人を愛することは則ち神を愛する所以であって、人は愛情の捧げものを供えて神を祭るべきであると云ふのである。實に彼（ペスタロッチ）は宗教の奥義に徹底して居るものと謂はねばならぬ。」(IV-472) そしてその根本にあるものとして、留岡は次のことを指摘する。「彼（ペスタロッチ）は人類相互を如何に見たかと云ふに、其の根本觀念は、天は父にして人類は同胞であるが故に人は互に兄弟姉妹であると云ふことだ。」(IV-471) あるいはペスタロッチの次の言葉を引用している。「相互友情の淵源は實に吾人人類が、皆神の子供なりと信じるによる。」(IV-471) ここに留岡はペスタロッチの信仰の核心を見ているように思われる。

かくして、留岡が引用するペスタロッチの次の言葉は、留岡自身の信仰観を表わすものであろう。「愛は唯一にして真正なる信仰の源泉也。……愛なくて人類に希望あるなし。同胞兄弟たるべきものを愛せざるものは、自己の有する最も善き能力を無益になすものなり。神を敬愛するものは亦其同胞兄弟をも親愛すべきもの也。人類が神を忘るゝに至るは薄弱と死滅との原因なり。」(III-36) ペスタロッチも留岡も、オーソドックスなプロテスタント・キリスト教会において強調される人間原罪説（人間の全的墮落説）をとらない。人間一人ひとりは、神の子であり、又神の子として互いに兄弟姉妹である。神と人間、そして人間同士は、親子、兄弟姉妹として本来的、本能的に親子の愛、兄弟愛が備わっているのである。それに気づき、それを發揮し、大きく育てていくことが宗教なのである。それは、「天の力と人の力」(II-542) に由る。「光りが太陽から来るやうに、偉大な靈の力は神から来る。」(III-344) そしてそれと一つに、「活動」があり、「修行」がある。これは、しかし安易な樂天主義ではない。「已に世路の嶮岨を知り、已に人生の弱きを知り、已に品性の修め難く操思の乱れ易きを知る。此の時に当りて、我れに限りなき力を与ふるものは何ぞ。祈祷即ち是れ也。祈祷は神と人とを通ずる靈の呼吸なり、聖なる冥合なり、心の鍵を以て神秘の扉に迫まる最大勢力なり。神はこれに由りて人間の

偉なる向上を許し、并せて完全なる発達を許し給ふ。……基督教徒無限精進の工夫は実に此の祈祷にあり」(II-161)。ここに、「所謂オルソドキシーでもなく、又ユニテリアンでもない」留岡の信仰の立場が鮮明に出ていると言えよう。

以上において、留岡のキリスト教信仰について見て來たが、次に家庭学校において具体的な教育が、いかに宗教に基づいているかを見ていきたい。

留岡は、北海道社名淵1,000町歩の原野の払い下げを受け、そこに新農村を建設し、その収益によって家庭学校を維持することを構想したが、しかしその地を選んだのは経済的理由からだけではない。むしろ何よりも、子どもたちが大自然によって感化されること、又大自然との全身全霊をあげての取組みの中で子どもたちが心身共にたくましくなり、成長し、変わっていくことを願ったからに他ならない。これは、留岡が感化事業に本気になって取組んだことを物語っているが、しかし更に留岡においては、大自然の創造主である神への信仰があったからこそ、果敢に実行したと言えよう。「何人も心して能く自然の相を見るならば、人間はおのづから神に行かざるを得なくなるのだ。之れが基督の自然観である。」(IV-60) 留岡は、「山上の垂訓」の有名な「野の百合、空の鳥」の箇所を引用し、このようなキリストの自然観を語っている。

「^{ネーチャー}自然は人間を育てる。又人間の堕落、病気等を癒すに偉大な力を有って居る。……今年で満三年間の実験によると、自然の懷に入れて人を教育することは理想以上に子供の身体及精神を良くするものであることが判った。」(III-465・466) 極めて厳しい条件のもとにある原野を開墾し、「感化農場」としたが、そこで子どもたちは心身を打ち込むことによって大きく変わったのである。これは、「流汗悟道」と言われ、又「三能主義」(III-379～383)と言われる。「三能主義」とは、「能く働き、能く食べ、能く眠る」ことであるが、これは、教育の^{いしづえ}礎であり、又「人生の幸福之に如くものなけん」(III-383)と言われる。自然是、人間に對し容赦のない厳しさと共に、畏怖すべき偉大な力と豊かな恵みを与えてくれる。しかし少年たちにとって、更にもう一つの自然、つまり human nature の真髓である情味豊かな家庭生活が無ければならないであろう。

家庭学校 the family school という名称は、まさに留岡の感化事業の本質を示すものである。留岡は次のように述べている。「若し今の学校教育から悪い生徒が出るとすれば、それは確かにこの家庭的情味の不足して居るといふことが其原因の一つであると思ふ。……家庭的情味は恰も軟かき草木に対する温室のやうなものである。いかに鍛錬することが必要だからと言つても、まだ軟かき草木を厳寒、酷暑のところに置きつ放しにするといふことは極めて危険なことである。……学校内に家庭の分子を成るべく多く入れ、又家庭内に学校の分子を成るべく多く入れ、そして知識と愛情とを搗き合せて教育するといふのが私の学校の要旨である。故に本来から言へば感化院とも言ふべきであるが、右の趣意から特に家庭学校と名づけたのである。」(III-464・465)

このような趣旨から、10人前後の少年たちが生活する小寮に必ず夫婦者の教師が住み、「凡てを家庭に擬した教育」(III-465)が行われている。この「夫婦制小舎」(家族舎)は、家庭学校

の最も重要な土台であり、全国の感化院（教護院）のモデルになったものである。

留岡は、ルソーよりもペスタロッチに傾倒したが、それは、ペスタロッチが家庭に重きを置いたからである。「宗教家としてのペスタロッヂの宗教思想は家庭から起ったのである。学校を建て、家庭を愛して、以て社会を改善しやうとしたのはルーソーの主義と異なって居る。」(II-19) ここで「宗教家」とか「宗教思想」と言われているのは、既に述べたようにいかにも留岡らしい。宗教の源泉としての家庭について、次のように言われる。「彼（ペスタロッチ）は宗教は決して教会牧師等に依りて得らるゝものに非ず、宗教の最も神聖にして且重要な信仰は母と子の間に成立するものなり、即ち子が母の胎内を出でゝ其膝上に在るの時に於て既に早くも萌さゞるべからず、母が子に対する幼時の愛は是れ慥かに信仰の源泉なりと。彼は如此にして其家庭を重じたり。」(II-208) 留岡は、ペスタロッチが家庭を宗教的意義にまで深めてとらえていることに賛同している。

このように、自然の感化、家庭における教育（「生活は陶冶する」）、農作業を中心とする労作教育等、いずれも近代教育思想の根幹をなすものである。このような教育が、家庭学校において他のどこよりも徹底して実践されているのは、注目に値する。しかもこの教育は、既に見たようにキリスト教信仰に基づいているのである。

確かに、自然の感化、家庭における教育、労作教育等は、一応宗教を抜きにしても考えられるものである。しかし家庭学校における教育は、少年たちのこれ迄の人生の背負いきれないほどの重い体験を変容させ、人生への肯定的な自覚に迄至らせるものでなければならない。自然の感化、家庭における教育、労作教育が、一般的な教育的意義を越えて、更に「魂の転換」に迄至らせるものにならなければならないのである。

原始林を切り開き、最低限の施設が整えられた創立5年目に、当時の事情からすれば不釣合なほど立派な礼拝堂が建設された。留岡は、そこで少年たちと毎日曜日礼拝を守った。しかし留岡は、信仰的情熱の余り次の一点を看過するということはなかった。「地球は自転しつゝ太陽の周囲を回転すると云ふが、宗教と教育は又それと同じ事で、自ら開発するにあらねば進歩発達するものでない。心にもなき多くの信者を作るのはむしろ宗教の真聖を汚すものである。即ち宗教の賊である。……人間は寒天でない。智慧の棒を突き込むでそれで人物とか品性とか、若しくは活ける学問など云ふものが出来ると思ふのは飛んでもない誤謬である。」(II-129) しかしながらかつ礼拝があり、説教があり、祈りがあった。留岡は、少年たちと共に礼拝し、祈ることによって何を願ったのだろうか。

留岡は、彼の教育観、宗教観に驚くほど似かよったブレー Reginald A. Bray の『都市の児童』("The Town Child") を知り、これを翻訳したが⁵、その中の次の二節を自分の講演に引用している。「敬虔の念は道徳の根源なり。児童の心にある『更に高き力』に依頼するの感情を促すもの、彼等を導き宇宙の秩序や、美や、又は其奇蹟に対し驚嘆の心を発せしむるもの……此等は皆敬虔の心を促進するものなり。」この引用の後、留岡は次のように述べている。「敬虔の念慮を起さしめずして教育は到底出来なからう。特に德育は此の敬虔の念慮に根ざすもの深ければ、敬虔の念慮を除外して德育を語らんとしても其れは出来ない相談である。敬虔の念慮を

養成することは取りも直さず宗教心を養成することにて、宗教なくしては教育は其根底を失ふのである。」(III-329)

留岡においては、祈り（これについては既に触れた）や礼拝は、自然、家庭、人間関係、仕事、活動等の体験の奥にある、「見えざるもの」への敬虔の念を一層深め、自覚化するものであると考えているように思われる。「見えざるもの」への敬虔の念の深化と自覚化は、道徳への活動力であり、魂を転換する力であるということであろう。

このような留岡の信仰と実践は、今日の北海道家庭学校に継承され、又その上に更に独自な発展が見られる。以下、現在の北海道家庭学校と現校長の谷昌恒氏の思想と実践のうちに、教育と宗教の問題を考えてみたい。

(二)

北海道家庭学校の在校生は、概ね小学校高学年から中学校卒業前後の年齢の少年たちである。この時期は、たとえ恵まれた環境、条件のもとにあっても、心身共に変化が激しく、不安定な時期である。谷昌恒校長によれば、この少年たちは、不幸に負けた少年たちである。恵まれた家庭、環境においても、問題を起こす子どもたちはいる。このような子どもは、この学校には来ない。この子どもたちを監督、保護しうる人たちがいるとみなされるからである。しかし又、不幸な状況にあっても、問題を起こさない子どももいる。人一倍苦労して普通の子ども以上に人間的に成長する場合もある。それに対し、生活の重荷に耐えかねて、問題を起こし、しかも監督、保護してくれる人々がまわりにいないとみなされた子どもたちが入校してくる。

少年たちは、入校時、不幸な家庭環境故に不平不満を持ち、又当然ながら大人不信、人間不信に陥っている。しかも同じように問題を起こしても、親に監護能力があるとして入校せずに済む者がいるのに対し、強制的に入校させられたことに強い不公平感を持ち、自分の運命を受け入れられないでいる。教育的に最も難しい状態にある子どもたちである。

しかし教護院である北海道家庭学校は、このような少年たちを普通の子ども以上に心身両面において鍛え、人間的に成熟した者として社会に送り出さなければならない。そうでないと、少年たちは世の荒波を乗り切っていくことが出来ない。つまり、受け入れ難い運命に挫けることなく生きていくこと、家族との厳しい関係になんとか対処すること、教護院にいたというレッテルをはられ、差別的に見られることに耐えていくこと、学歴社会の中で、ほとんど学歴がないというハンディを背負って生きていくこと、そして何よりも方々で待ちうけている誘惑に負けないこと、そういうことがなんとしても出来る人間となって世の中に出ていかねばならない。

しかし北海道家庭学校の願いは、これに留まらない。「北海道家庭学校は、社会事業屋の仕事ではありません。およそ教育の本質を追い求めることこそ、私たちの忘れてはならない一番大切な仕事であります。」(3-172)⁶⁾ 単に現実的な処置ではなく、理想とも思える教育を全力を挙

げて追求しようとしている。谷校長は、次のように述べている。「一教護院の存在という問題をはるかに越えて、真正の教育の場として、さらに遠い将来まで生き続けたい。そのことを切に願うのです。」(7-39)

北海道家庭学校の人間教育は、徹底していると言える。既に述べたように、人間にとって最重要の、しかも最も難しいいわば「魂の転換」とも言うべきものをめざしているのである。「どう考えたってこんなひどい生活はないと思われるような、地を這うような生活をしている少年諸君に、私はそれでもその自分の運命を愛そう、そういう惨めな運命であればあるほど、その前に立ちはだかって文句をつけていたらますます自分が惨めになるだけだ、運命というものは、愛することによって潑刺としたものになるんだ、それを私は少年諸君と共に考えたいといつも思っています。」(「少年たちと生きる」132・133頁)⁷⁾ 単に運命に耐えるだけでなく、耐え難いような自分の運命を愛するようになること、これは、やはり「魂の転換」と言う他ないであろう。

次のようにも言われている。「諸君、どうか諸君が受けた、いろいろな没義道な仕打ちを、ぐっと、自分一人の腹の中に収めてしまって下さい。大人もできなかったのです。さんざん諸君を苦しめてしまったのです。虫のいいお願いだということは、よく分かっています。」(7-96) 大人にも出来ないような難しい心のあり方が、繰り返し直截に少年たちに求められている。「人間というものが、どんなにか罪深いものであるかを自ら知ってほしいと思うのです。そうした立場から、御両親を包んで上げてほしいと思うのです。」(1-277) 親とのどうすることも出来ないような葛藤から問題を起こした少年への言葉である。

「許すことが私たちの生活の目標なのです。許すことを願い、むしろ許されることを願って生きることが、私たちのここでの生活の目標なのです。」(7-240) 「許すこと」も、場合によっては至難の業であるが、しかし他人を許す立場にある者が、自分が許されることを願って生きるということは、更に難しいことである。道徳的なことを越える生き方であると言わなければならない。

北海道家庭学校では、年に2回、夏と正月の頃に一時帰省を認めている。帰れる子どもは、喜んで帰るが、いろいろな事情で帰れない子どももいる。不公平と言えば、不公平であるが、このことについて、谷校長は次のように言っている。「私は次元を全く異にした世界で、子どもたちの間の友情の成立を信じているのです。僕はいいよ。僕は帰りたくたって、家がないんだ。……しかし、君たちは違う。君たちは帰っておいでよ。帰って、たまには親孝行をしておいでよ。帰れない子どもがそう言うのです。帰れる子は、帰れない子どもに対して、いかにも済まない思いがするのです。ありがとう。それでは、君たちの好意に甘えて、帰ってこようか。何だか、申し訳ないみたいだなあ。……帰れる子どもたちはそう言うのです。私はそういう友情が成り立つと願っているのです。」(5-288)

この学校を早く巣立つことが出来る者もおれば、そうでない者もいる。巣立っていく友人の喜ぶ姿を見て、共に喜ぶということはなかなか出来ないであろう。しかしこのようなことが言われている。「諸君はいつも、いつでも、仲間の幸せを素直に祝福できるひろい心、大きな気持

を持ってほしいのです。よかったです、君はいよいよ卒業か、おめでとう。そう言える人になってほしいのです。」(8-123) 不公平、不平等に思えることも、それを「広い心、大きな気持」で越えて、積極的に友情を築き、友を祝福する心が求められている。

「愛されたい、守られたい、何かをしてもらいたいという姿勢でいる限り、不満や不平はつきないです。愛する側、尽くす側に立つ時、恨みも迷いもない生活がはじまる。私はそう思っているのです。」(5-14) 同じ年代で、誰よりもひどい状況に置かれている少年たちに、愛する側、尽くす側に立とうと呼びかけている。

「寮に、教室に、学校に、又、職場や社会に、一人でも二人でも、断然頑張る人がいると、引きずられて、だんだんみんなが頑張るようになることがあるのです。……諸君。私たちは中核になって、燃えて輝く存在であろうと思います。願わくばそうした存在であり続けたいと思います。」(3-157) 少し違った言い方で次のようにも言われている。これは、職員に対し語っている言葉であるが、しかし表現を変えれば、少年たちに対しても願っていることであろう。「みんながそういうこと（ただ働き）をしろと言ってはいません。昔からバカは少しあいませんでしたから。ですけれども、ほんとうに少しあないバカが世の中を支えてきたのです。だからそういうバカでありたいと思います。」(「少年たちと生きる」50頁)

以上見てきたように、この学校においてめざされているのは、単に道徳というものでなく、それを越えて宗教的なものであると言わなければならぬであろう。「幼にして、強烈な人生体験を重ねて来た少年たち。私どもはその少年たちと共に、相携えてその悟りにまで至りたいと願っているのだと言えようか。しかも、少年たちの何人かが、淡々としてその悲運に耐えているのを見る時、こうした悟りは年齢にはかかわらないと心から感嘆する。」(3-113)

この学校に入校して来る少年たちは、例外なく道徳や宗教に対し反感を持ち、反発している。それにもかかわらず、深い自覚を持って修行している大人でさえ難しいことが、この少年たちに起こっているというのは、一体どういうことであろうか。

既に見て来たように、確かにこの学校は、現在なお130万坪の敷地があり、森の学校と言われるように実に豊かな、恵まれた自然環境の中にある。これは、もちろん創立者の留岡が先ず第一に考えたことであった。大自然の感化力がこれほど豊かにある学校は、他にはないと言えるかもしれない。毎年秋に、収穫感謝祭が開かれ、数日にわたって各作業班が一年間の活動報告をする。山林部、土木部、蔬菜部、園芸部、果樹部、木工部、工作部、養鶏部、酪農部という9つの作業班があるが、一年を通じ一般の教科学習を午前中（週20時間）にすませ、午後から班にわかれて2~3時間作業が行われる。（水曜日と土曜日を除く。）⁸⁾ 一年間の活動報告に対する校長の毎年の講評が、『ひとむれ』（評論社）に掲載されているが、少年たちがいかに全身全霊をあげて作業に取組み、多くのことに感動し、学び、心身を鍛えられ、たくましく成長しているかが分かる。「よく働き、よく食べ、よく眠る」という「三能主義」が見事に実現されている。

夫婦制小舎（家族舎）の寮生活は、少年たちにとって多くの面で実の親兄弟のいる家庭生活よりはるかに恵まれた生活環境であり、ペスタロッチの「生活は陶冶する」ということが実際に可能である。

谷校長が強調するように、この学校の教育は、全人教育である。いわゆる 3H's, つまり Head (頭), Heart (心), Hand (手, 身体) の調和的発達だけでなく、「1 日24時間, 1 年365日, その生活のすみずみまで, きびしく問いただされるのです。諸君は本当に大変だと思うのです。全人教育とは, 正にこのことを言うのです。人間として私たちのすべてが問われるのです。私たちは全人間性を養おうとするのです。」(4-265) と言われている。このように、この学校は、教育の場として最大限の工夫・努力がなされていると言えよう。

しかし、少年たちは、既に何度も述べたように、入校時には大人不信、人間不信に陥っている。特に道徳を説く親や教師の偽善性に極めて敏感であり、それへの反発は、尋常ではない。寮長夫婦をはじめ、教職員は、1 日24時間、1 年365日そのような少年たちと共に暮らし、人間として厳しく問われている。「自分はプールサイドに立っていて、水の中の少年たちに水泳を教えるわけにはいかないであろう。私たちが全人教育と呼ぶものは、実は教師自身も裸になって水の中に飛び込むこうした姿勢を言うのである。」(2-322) 恵まれた教育的環境、ふんだんに用意された全人的活動の機会、そこでいかに豊かな体験が可能であるとしても、その前提となるのは、やはりそこにいる人間であり、人間関係である。

谷昌恒校長は、大学で地質学を専攻する研究者であったが、終戦直後、研究室を去り、福島県の山村に、戦災孤児や浮浪児の為の養護施設を開設し、20年間施設を運営、昭和40年に新設の社会保障研究所に研究員として招かれるが、昭和44年留岡幸助の四男留岡清男校長に後を託され、北海道家庭学校第5代校長に就任する。(旧制)高校時代から、すぐれた師に恵まれ、又深い主体的欲求からスピノザ、アラン、ニーチェ等と共に、ルター、パスカル、バート等のキリスト教思想家に傾倒、就中一校教授三谷隆正との出会いを通して、キリスト教信仰へと導かれた。

谷校長の礼拝の説教やその他折々に少年たちに語られる言葉は、『ひとむれ』(評論社刊)に収録されている。「子どもが納得できないこと、分からぬことでも、私は言っておきたいと思う。言っておかなければいけないと思っている。」(3-289) あるいは次のようにも言われる。「今日は、何と難しい話をしたことでしょう。おそらく諸君の理解を越えていると思います。しかし時たま、死について、また神について、思いをめぐらせたいと願うのです。」(4-20) ニーチエの「運命愛」、アリストテレスの「中庸」、孔子、孟子や釈迦の教え、他方山本周五郎やその他の文学作品等、聖書やキリスト教の思想と共に、少年たちにはなかなか理解し難い話も含めて、実に広く深く人間について、又人生について自由に語られている。

しかし又、ただ語られるというだけでなく、例えば毎年仏教の旧盆の時期に慰靈祭が行われる。「旧盆とキリスト教とは何の関係もないが、故人を追慕する行事はこの季節が一番ふさわしいように思う。」(2-59) あるいは次のようなことが目にとまる。「4月8日の日曜礼拝は、ちょうど花祭りの日に当っていました。私は心から仏祖の降誕を祝い、灌仏会と呼ばれる行事について話をしました。」(5-86)

キリスト教の信仰に生きつつ、他宗教や神を否定するニーチエの思想に対しても、寛容であ

り、柔軟であるが、しかし単にそれだけではなく、むしろ信仰の故に自由であり、積極的な関心を持っているように思われる。「戦前に育った私には、仏教と儒教とキリスト教の三つの教えが、心の底深く生きています。それこそ全宇宙をつつみ込んでしまうほど広い、偉大な、数々の教えの、ほんの一部にしかすぎないと思うのですが、強い感銘と共に、私の心の中に生き続けているのです。」(3-274) そして最後には次のように言われる。「今までも、今も、そして今後とも、私にとっては仏の教えも、孔子の教えも大切な糧なのです。それらの糧を仰ぎながら、私は一そうイエスの道を学びたいと思います。」(3-279)

ここに、信仰の故に他宗教や他の思想に積極的に関わっている姿勢が見られる。教育にとって、広い自由な、又奥深い精神的空間が必要である。子どもは、難しいことは分からなくても、精神の空間性には極めて敏感である。教育する者の精神の狭さ、堅苦しさに対し、子どもは感覚的に反発する。子どもにとって、周りの大人の精神的空間の広さ、柔軟さ、温かさは、決定的な意味を持っている。但し、精神的空間は、単に制約や限定がないというだけで開かれるものではない。教育の場においては、教育する者の生き生きした、すぐれた思想、信仰によってのみ、その空間が開かれる。しかも多様な思想がただ羅列されるのではなく、心底からの愛と畏敬の念による思想でなければならない。それは、生きた信仰から可能になるのではないだろうか。

ところで、教育する者は、子どもたちにとって生きる上でのモデルである。しかし教育する者も又、生身の人間である。弱みを見せまいとして取り繕うならば、少年たちは直ちにそれを見抜いて反発する。しかし弱さを隠さず、オープンであるだけでは又真実の生き方を語ることは出来ない。そこには何よりも先ず深い信頼関係がなければならないであろう。

その為には、先ず教育する者の側が、少年たちをどこ迄も信頼しなければならない。「諸君の中に、私たちの中に、およそ人間一人ひとりの中に、善への意志があるのです。諸君に対する私の信頼は、諸君の中にある善への意志に対する信頼であります。その信頼は少しも揺らぐことはありません。どんなことがあっても、その信頼は薄らぐことはないのです。」(3-100) これは、誰もが一人ひとり神の子であるというペスタロッチや留岡幸助の信仰と軌を一にするものであると言ってよいであろう。

教育する者も又、失敗したり、誤りを犯したりする。少年たちの前に自分の弱さを認め、時には許しを乞わなければならない。しかもなおかつ少年たちと厳しく生き方を問い合わせ、真実の生き方に向かおうとするものでなければならない。その為には許しを祈り求める「信仰」(6-38) がなければならない。教育する者が、「目に見えないもの」への信仰と畏敬の念をいただき、その信仰において真実に生きようとする生き方によってのみ、少年たちからの信頼を得ることが出来、「目に見えない」権威が保たれるであろう。ここに、「醜い、弱い人間が、それなりに素裸になって、子どもにぶつかっていく」(『いま教育に欠けているもの』⁹ 56頁) ことが可能になるであろう。

谷校長は、少年たちに率直に自分の弱さを認めている。「恥ずかしいことですが、怒りや憎しみの感情に負けて、私もずいぶん醜いふるまいをしてきました。怒りや憎しみから、深く相手

を傷つけ、自分も傷ついてきました。」(8-106) しかし他方、次のような厳しい態度も見られる。「人間は壁につき当って、はじめて成長するのです。本人の意に反することに直面させる。教育はそこから始まるのです。」(5-208)

教育においては、この両面が必要である。このことは、「目に見えないもの」への真実の信仰と畏敬の念によって、「目に見えない」権威が保たれて初めて可能になると言えよう。「教育の基本は祈りです。祈りはむしろ生きることの基本でもあります。目に見えないものに対する畏敬の念を祈りと言うのです。」(7-32) この祈りの真摯さのみが、教育する者に権威をおびさせると言ってよいであろう。

しかし谷校長によれば、教護院においては、信仰は一層深い意味を持つのである。「教護職員として七年、私には仕事そのものが信仰を抜きにしては考えられないものとなった。罪人としての打碎かれた自覚と、神の許しの中に生かされている喜びとは、信仰によってはじめて与えられるからであった。それは自らを恥じながら、自らを誇ることを求められている少年諸君の課題と全く等しいのである。私たちが自らを義としている限り、教護院にいる惨めさに耐えている少年たちと、共通の地盤に立つことは出来ない。教護の仕事の意味を問うことと、信仰を問うこととが、私にとって一つのものとなったと言うのはこうした理由からである。」(2-255)

信仰は、自分を取り繕うことなくありのままに生きつつ、なお少年たちと真実の生き方を厳しく問い合わせ、語り合うことを可能にするが、それだけでなく、「罪人として打ち碎かれ」、少年たちと同じ地盤に立ちうること、しかも「神の許しの中に生かされている喜び」によって、少年たちと共に安心して立ち上り、立ち直る努力をしうること、又立ち上り、立ち直ることが出来るという希望を持ちうることが可能になるのである。

ここから、少年たちに、現実の人間、現実の社会の罪深さ、不公平さ、不条理さが、実に端的に語られる。ここには、現実を甘く見たり、美化したりするような楽観主義はない。普通の教育の場では考えられないほどの厳しい現実の認識がある。許されること、安心して努力しうること、立ち上り、立ち直ることが出来ることの信仰的確信がなければ、教育の場においてこのようなことはありえないであろう。

谷校長の信仰に基づく人間観として興味深いのは、人間が常に「途上にある」ということである。「真実に生きているということが、どんなに大変なことであるか。そのことが本当に分かってくれたとしたら、又それを真剣に追い求めるとしたら、私どもは終生未完成であることを、途上にあるものであることを恥じることはないであろう。」(1-150) これは、一方では「自分は正しい」とか「自分は分かっている」という自らを義とし、自分を絶対化することを防ぎ、一層向上すべきであり、又向上しうるという自覚を与えてくれるが、それと共に他方、未完成で、中途半端なままの自分や他者をそのまま受け入れ、安心して努力し、又応援出来るのである。これは、教護院の仕事のみならず、そもそも教育と言われるもの全てにあてはまる人間観であると言えよう。

既に述べたように、この人間観は、信仰に基づいたものであるが、その信仰の真実は、「見えざるものへの畏敬」ということである。「この時代に、キリスト教会のおかれている立場と、

その責任について考えるのです。今こそ信仰の真実が伝えられなければならないと思うのです。見えざるものへの畏敬。文明の便益に溢れた今日、心の最も基本的な姿勢について、きびしく問い合わせていることはないか。私はしきりにそのことを思うのです。」(4-221)（傍点は筆者）「見えざるものへの畏敬」は、自己の信仰を固定化したり、独善的なものにしない。奥深さの認識や、それと表裏をなすソクラテス的「無知の知」の自覚が深められ、又それと一緒に層他に対し開かれていくのである。「見えざるものへの畏敬」は、自他に対し精神の生きた空間を広く深く開いていくのである。留岡幸助のところでも述べたように、畏敬の念によって、自然の恵みと厳しさの中に、又家庭的人間関係をはじめとする愛の関係の中に、「見えざるもの」への深い奥行きが開かれるのである。

ところで、最初に述べたように、北海道家庭学校は、教護院として少年たちをその意に反して入校させる教育施設である。そのような学校が、キリスト教という特定の宗教をかけるということは、どう考えればよいであろうか。これは、教育と宗教という問題を考える際に、抜き差しならないケースであると言ってもよいであろう。

谷校長は、この問題に関し次のように述べている。「宗教教育の必要なこと、宗教的情操を養うことが願わしいことは、誰でも説くことです。しかし、一宗一派に偏してはならないとも言うのです。およそ宗教一般というものは存在しません。存在するものは一宗一派なのです。……宗教教育は、したがって、一宗一派の教育としてしか存在しないのです。本校は創立以来、キリスト教の教育を伝え継ぎできました。『礼拝を強制するのですか』 しきりにそういう質問をする学生がいます。『礼拝は出ることになっているから出るのです』 質問に対する答えにはなっていないかも知れませんが、私はそう答えます。日常生活の流れの中で、私たちは礼拝を守り続けてきました。少年たちをキリスト教の信者にするなどとは少しも考えていません。ただ、聖書を通じて、真実を学びたいと願っています。一宗一派の教えを伝えることは少しも差しつかえないと思っています。伝える私たちに健康な平衡感覚が求められていることを強く自覚しています。日曜日の礼拝は、私にとって最も大切な勤めの一つであり、心をこめ、十全の準備を重ねて、その勤めに当りたいと念じます」(6-33・34)

宗教教育は、一宗一派の教育としてしか存在しないと言われているが、確かに教師が多くの宗教について多くのことを伝えたからといって、それで宗教教育になるわけではない。個人的、実存的に一つの信仰に生きているのでなければ、宗教が分かっているとは言えない。無論、信仰に生きていると言っても、その人がどこかの既成教団に属していなければならぬということではないであろう。ただやはり宗教一般、信仰一般というものでなく、実存的決断、集中がなければ、信仰とは言えないのである。

但しその際、「健康な平衡感覚が求められている」と言われている。この「健康な平衡感覚」は、信仰者が陥りがちな、独善的、排他的あり方を防ぐものとして考えられているであろう。信仰とこの「健康な平衡感覚」は、両立がなかなか難しいようにも見える。それは、常に一種の緊張関係にあると言われるかもしれない。しかし、先に述べたように、「信仰の真実」が「見えざるものへの畏敬」であるとすれば、独善的、排他的になることはない筈である。従って、

本来信仰と「健康な平衡感覚」は、対立するものではなく、むしろ「信仰の真実」から「健康な平衡感覚」も生まれてくると言ってよいのではないだろうか。

もしも以上のように言えるとすれば、一宗一派の宗教教育が問題であるというのではなく、教育する者の信仰、つまりその「信仰の真実」如何が問題であるということになろう。確かに、信仰者が、独善的、排他的になるという危険性は常にあるが、しかしそれは、単に危険性であって、本来、その信仰において、「信仰の真実」に生きることが出来るのである。従って、その危険性の故に、宗教教育を除外する必要はないであろう。もしもその危険があるから宗教教育を避けるのだとすれば、逆に宗教を通してのみ達しうる教育の本質的なものを失うという危険に陥ることになろう。教育する者にとって、為すべきであり、又為しうることは、ただ自分の「信仰の真実」を常に問い直し、「信仰の真実」に生きうるよう祈り、努力することではないだろうか。

北海道家庭学校の教育の“結実”（このような言い方は、適切ではないかもしれないが）について知るには、谷校長の次の言葉を見れば十分であろう。「多くの卒業生が家庭学校をおとずれます。それは在校生諸君が知っている通りです。先輩がこの家庭学校で学んだことは、決して名誉なことではなかったはずです。……卒業して三年、五年、十年、ここに生活したことを伏せていましたかも知れませんが、若い日を過したここでの生活が忘れられなくなるのです。一生懸命にすごした、頑張って、我慢して、耐えてすごした日々が無性に懐しくなるのです。先輩は奥さんと共に、時には、もうういぶん大きくなった子どもさんたちを連れて、ここを訪ねてくれるのです。こんな嬉しいことはありません。」（7-130）

ここに、北海道家庭学校の思想と実践の、一つの、しかし計り知れないほど大きな“結実”が見られると言ってよいであろう。

註

- 1) ローマ数字は、『留岡幸助著作集』（同志社大学人文科学研究所編 同朋舎刊）の巻数、算用数字はその頁数を示す。以下同じ。
- 2) 井上勝也著『留岡幸助の教育思想』（『キリスト教社会問題研究』同志社大学人文科学研究所発行、第28号所収）89頁。
- 3) 上掲書90頁。
- 4) 同上。
- 5) 翻訳書は、『都市の児童 全』（編集兼発行者 大日本文明協会、大日本文明協会事務局発行）として、大正3年7月に刊行された。
- 6) ゴシックの数字は、谷昌恒著『ひとむれ』（評論社刊）の第何集かを示す。但し『ひとむれ 北海道家庭学校の教育』は第一集とする。算用数字は、その頁数を示す。以下同じ。
- 7) 谷昌恒著『少年たちと生きる』（日本基督教団出版局刊）
- 8) 花島政三郎著『サナプチの子ら 北海道家庭学校の生活』（評論社刊）55頁参照。
- 9) 谷昌恒著『いま教育に欠けているもの——私の道徳教育論——』（岩波ブックレット No. 45）

〔本稿は神戸女学院大学研究所1991年度総合研究助成金による研究成果である。〕

（原稿受理1995年11月30日）